

## 「神戸女学院同窓会設立百周年記念式」報告

神戸女学院同窓会誌「めぐみ」第四号（明治二十五年四月発行）に、「吾校ノ卒業生ヲ出ダス事已ニ六十九名余ニ及ビ……爰ニ在神ノ卒業生舉リテ發起人トナリ一ノ神戸英和女學校同窓會ナルモノヲ組織セント望ミタリ其目的トスル所ハ單ニ卒業生トノ關係ノ一點ニ止マラズ進ンデ學校ノ助ケトナラン望ミナリ……」と記された神戸女学院同窓会は、一九九二年十月八日、設立百周年記念式典を講堂において執り行なった。この日はあいにくの雨天となり、参会者の出足が心配されたが、高齡会員の方々も続々とお集まりになり、講堂はほぼ満席となった。壇上には向かつて右から原田恵子・中高部長、小玉佐智子・大学学長、城崎進・院長、茂洋・学院チャブレン、高倍幸子・同窓会長の順に着席、司会者席には阪西まち子・同窓会副会長。下手奥には、高等学部第七九回卒業溝口芳子姉（大学研究所）によって竹に生花が金屏風を背に華やかにしつらえられ、座席は五七〇余名の来賓、恩師、同窓会員で埋まった。

式は音楽学部第九二回卒業太宰まり姉（音楽学部非常勤講師）による前奏で始まり、続いて一同で讃美歌九〇番を唱和。小玉学長が聖書へブル人への手紙一章八節から一六節を朗読。原田中高部長が百年の同窓会の歩みを感謝して、これからも愛神愛隣の精神を示してゆく神戸女学院であり、それを支えてゆく同窓会として歩めるようにとの祈りを捧げられた。

次いで「はるかにそれを見てよろこびの声をあげつつ」と題した茂チャブレンの奨励。へブル人への手紙から「アブラハムは約束されたものを手に入れなかったが、はるかにそれを見て喜びの声をあげ天の故郷を熱望しつつ歩んだ」という名言を引き、神戸女学院が恵まれた時にもそうでない時にも最善の教育を営んできたことを強調された。また、岡田山移転の困難な時期を、神戸



女学院とコーベ・カレッジ・コーポレーション(KCC)と同窓会が一体となり、愛神愛隣の精神によってみごとに乗り切ったように、この学院がどのような時代の中でも常に真実なるものを見上げつつ、喜びをもって歩み、学院と同窓会とKCCの三者のつながりを深めつつ新しい時代を築いてゆくように期待したいと結ばれた。

場 一同で讃美歌二九四番を歌ったあと、高倍同窓会長の式辞。一八九二年(明治二十五年)に第一回同窓会集会が開かれて以来今日に至る同窓会の百年の歩みは、会員相互の親睦をはかるとともに母校の発展を願ひ、母校の隆盛をはかるために力を注いだ百年であったことを願ひ、現在の岡田山の用地を買う基金となった大蔵谷の用地買収に取り組んだこと、学院七十五周年、九十周年には募金をして母校に「めぐみ教育基金」として捧げ、毎年のバザーの収益もこの基金に繰り入れられてきたこと、また、毎秋開催されるめぐみ会、宗教講話会、会員合同追悼会のこと、終身会費制度が導入されたこと、さらに山本通の家齊館を岡田山に移築した同窓会館が一九八〇年に現在の同窓会館に建て替えられたことを語られた。そしてこの度同窓会設立百周年記念として、第一八回卒業の岡田かつ姉寄贈の土地を売却し、これに多くの会員の寄附を合わせて一億円として学院に捧げたことを報告された。最後に、愛神愛隣の精神によって播かれたみ言葉の種が神のみ恵みを受けて育まれ百周年の実りの時を与えられたことを感謝し、今後の同窓会の歩みが常にみこころにかなうよう、会員一人一人の支えと協力を得て励んでゆきたいと述べられた。

次に城崎院長の祝辞。まず「学校法人神戸女学院寄附行為」の前書を取り上げ、神戸女学院は学院とKCCと同窓会の三者の共同の業であり、深い信頼と協力による親密な関係を維持し運営されてきたことを強調された。また、学校教育の評価は教育成果としての卒業生の社会に於ける生き方及び働きによって判断されるべきであるが、この点我が同窓生は神戸女学院に対する極めて高い評価を支え、学院の営みを三者共同の業として立派に担っていて下さると述べられ、学院の教育の中に建学の精神が生きて働い

ているなら、その精神を体験しこれに共鳴する卒業生を送り出すことは可能であり、それこそが学院の使命であり誇りであるとの熱い思いを語られた。

続いて、設立百周年の記念として神戸女学院の教育基金に一億円の寄附を捧げた神戸女学院同窓会と、めぐみ教育基金に一千万円の寄附をなされた学校法人神戸女学院顧問の澤田利秋氏に、院長から感謝状が贈呈された。

このあと音楽学部第九回卒業荒田祐子姉（音楽学部非常勤講師）が音楽学部第一〇五回卒業神吉 泉姉の伴奏でヘンデル作曲「ラルゴ」とR・シュトラウス作曲「献呈」を、列する者の心を魅了するふくよかなアルトで歌われた。続いて頌栄五四一番を一同で歌ったあと、茂チャブレンの祝禱をもって式を終え、司会者により祝電の一部が披露された。めぐみ会と長寿会の新入会員への記念品贈呈と旧恩師の紹介がなされた後、祝賀懇親会のため新体育館に会場を移した。

懇親会は八代仁和子副会長の司会で始まり、溝口百合前同窓会長の食前感謝の祈りの後、会場全体に用意された立食パーティのテーブルから、お寿司、サンドイッチなどいただきながら楽しい和やかな昼食の時を過ごし、なつかしい方々との再会の喜びを味わうことができた。会場では赤いエプロン姿の在校生が、食事とお茶のお世話をして下さった。食事も終わりに近づくころ、吉駒ひろ、奥田久子両元同窓会長が、この日を迎えた感謝の気持ちを述べ、同窓会には次代への橋となり学院と社会の橋となるという役目を果たしてゆく責任があることをお話しになった。会場には音楽学部卒業生による「クローバー・カルテット」の弦楽四重奏や「プティ・タ・プティ」の歌声が響いた。

めぐみ会員の高等部家事教育科第六〇回卒業の佐藤章子姉と高等女学部第五七回卒業の越智晴子姉のお二人が五十余年前の思い出に触れ、「今日の楽しい集いが今後の人生の活力となってくれるでしょう。」との挨拶を述べられたあと、全員で学院歌を斉唱した。高倍会長がお礼の言葉を述べ、楽しい時を感謝し、また飢えに苦しむソマリアの子供たちへの献金を呼びかけられた。こうして神戸女学院同窓会設立百周年記念の一日は終わった。そして、新たな百年に向けての最初の歩みをソマリアの子供たちのために献金を捧げる業によってスタートした同窓会の精神を、この同窓会に列なる者としてしっかりと守り続けてゆかなければとこの思いを強くし、また、この会のためにご奉仕下さった方々に深い感謝の念を覚えつつ、会場をあとにした。

（栗木 順子）